

『ブレーキ』時飛葉かなた 4219文字

あらすじ

満員電車の中に虫が入り込んでいる。人がひしめき合う空間で、自由なのはその虫だけだった。全員がストレスに耐える中、1人の女性がヒールの音を鳴らす。虫はその女性に目をつけると……。

本編

満員電車の中に虫が入ってぶんぶんと飛び回っている。虫の姿はよく見えないが、羽音の鬱陶しさからそこその大きさを感じさせる。身動きの取れない車内で「頼むから自分のところには来ないでくれ」という心の声が充満しているようだ。ただ一匹、この中で生き生きと飛び回る虫は右に左へ、人から人へと人間の不自由が私の自由だと言わんばかりである。誰の体に触れようと、どんなことをしようとも、この状況で人は虫に抵抗することができない。次の駅までの10分間、人はこの虫に弄ばれることが確定している。

ダンッと誰かがヒールで床を踏みつける音がした。そのあとに虫の羽音が下から上に登っていく。その音の流れを聞いて、足に着いた虫を払おうとしたのだと誰もが理解した。

しかし、これは悪手である。虫は好物を見つけた、と言わんばかりにヒールを鳴らした彼女の上でとび続けることにした。ゆっくりと虫は上下を繰り返して、彼女の頭から順に羽音で舐めまわしていく。頭頂部から後頭部、首の後ろからまた頭の上に。彼女に近づいたり離れたりしながらも、決して肌には触れないよう、執拗に羽音を鳴らす。

羽音が上から下に降り続け、彼女の耳の周りを攻め始める。近づいて、離れて、横切って、また近づこうとしたとき彼女は頭をふるった。

「チッ」

周りの人に彼女の髪が当たって、その中の一人から舌打ちをされる。彼女はその音を聞いて大人しくなった。また虫が鬱陶しい羽音を彼女に聞かせ始める。近づいて、離れて、横切る。

彼女はなぜ自分が狙われているのかを考え始めた。私が足を鳴らしたからだろうか。軽く足を動かそうとしたただけだったのに。バランスを崩して音が鳴ってしまっただけなのに。

それとも、ほかの人のところに虫が行ってくれればいいなんて思ったからだろうか。もし自分以外の
人に虫が行ってしまったら、その人が私と同じ苦しみを味わっていたのに。

そう考えると、私が虫に狙われているのもいいのかもしれない。みんなが快適に過ごせるよう、仕事
をしていると思えばいい。虫は彼女が考えている間、離れたところから様子をうかがっていた。彼女が
諦めたのを虫は悟り、また羽音を鳴らし始める。

どうせ、ただの虫だ。害はない。ただ気持ち悪いだけ。

羽音が横切って、近づいて、ぴたりと止んで、うなじにゾワゾワとした感触がうまれる。ただの虫、
害はない。

虫は彼女の首元を這い続ける。頭の方へ、背中側へ、右へ左へ。そしてちょうど背中とうなじの中間
地点に止まると、チクリとした感触が彼女を襲った。反射的に頭を振る。「ふざけんな」と隣の男が言
った。無理だった。我慢なんてできない。しかし、体を動かそうとしても、周りの人の鬱陶しいものを
見る目だけが返ってくる。

虫はゾワゾワとした感触をうなじからどんどん前に広げてくる。左の首筋から鎖骨にきて、そのまま
下の方に広がっていく。顎を下げると、そのまま潰してしまうのが嫌で上を向く。虫はそのまま胸の間
を通過して服の中に入っていった。

ゾワゾワとなぶるように虫は進む。少しずつ下がって行って、ブラジャーを通り過ぎる。彼女は「ん
ん」と泣きそうな声を出して周りを見た。そこにあったのは心配そうな表情でも、同情でもない。ただ
「お前が犠牲になってくれれば俺たちは安心だ」という空気感がそこにはあった。虫は彼女の臍まで到
達している。

ただの虫。気持ち悪い。ただ、気持ち悪い。

虫が前の人と自分のおなかに挟まれて潰れないよう、必死に力を籠める。人の熱気か緊張のせいか、
彼女の体は汗だくになっている。虫がつぶれて、その体液が自分のおなかにべっとりと広がる嫌な想像
が膨らんでくる。いやだ。いやだ。

上に上げていた腕を前の人の中へ押し込んでいく。少しでも隙間が欲しい。力を入れれば入
れるほど背中へ反発してくる。前の人へのイラついている感情と虫のつぶれる想像がどんどん大きくな
る。彼女は音もたてずポロポロと涙を流す。いやだ。いやだ。いやだ。

限界になった彼女の腕から力が弱まり、前の人の背中がおなかに当たった。ゾワゾワとした感触がぐっとお腹にめり込んで、虫は潰れずにぼたりと床に落ちていった。

彼女はすっかり安堵した。電車を降りて、早く服の中を確認したい。あの虫が這いまわった部分をすぐにでも洗い流したい。上着の袖を使って涙をぬぐう。こんなことで泣いてしまうなんて。前の人にも申し訳ないことをした。それでも何とか乗り切った。そういう達成感が彼女にはあった。

『次は、くれはね。くれはね。お出口は右側です』

聞きなじんだアナウンス。満員電車の中の殺伐とした雰囲気や和らいでいく。あと一分もしないうちに駅へ着くだろう。彼女に対して冷たい感情を持っていた周りの人間も、少しだけ心配そうな視線を向けているような気がする。

早く電車を降りたい。そう思った時に脛のあたりにゾワゾワとした感触があることに気がついた。彼女は軽く足を上げてトンツと振り下ろす。感触はなくなる。

もう一度振り下ろす。感触はなくなる。でも何かが動く感じもしない。

スカートが脛に当たっているだけだと思った。出入り口の掲示板を見る。『くれはね』という文字が光っている。駅に着くまでもう少し。

何となく。ゾワゾワとした感触がまだ上に登ってきているような気がする。足を上げて、降ろす。コロンと何かが落ちた音がする。ゾワゾワがゾワゾワに変わり、あの虫がついさっきまで這っていたことを実感させられる。お願いだから、もう私のところに来ないでくれ。

虫が羽音を立ててスカートを飛び出した。一瞬にして虫の感触が消えるが、彼女は安心できない。虫の気配を探る。足元、天井、人の隙間、どこにもいない。羽音が大きくなった。掲示板に目を向ける。

『くれはね』という文字の横に、虫がとんでいる。

大きさは大人の親指ほど。頭部とお尻が大きく、その間は細い。そして、その虫の頭部は真っ黒い水晶のようになっている。眼球も口も何もついていない。虫はこちらに腹を向ける形でその場を飛び続け、腹に生えている無数の小さい触手を見せつけている。

蝉でも蠅でも蜂でもない。見たことも聞いたこともない異様な虫。

彼女は目が合っているような気がした。その虫が自分を見ているような気がした。虫は動かない。それでもその視線だけで、今まで全身を這いまわったあの感触が何度も何度も体を駆け巡る。体中の産毛

が逆立って、冷や汗をだらだらと流し始める。

視界の中で少しずつ虫が近づく。腹についている触手のうねうねと動く様子がより鮮明になり、頭部の水晶には自分の姿が反射している。汗で髪が額に張り付いた、ひどい表情。

羽音が少しずつ大きくなっていく。

「い、嫌っ」

自分の心の中にあるものが自然に漏れた。そういう眩き。彼女の目からは涙がこぼれ始める。虫は彼女の視界から外れて、左の耳に近づいていく。彼女はその羽音から逃げるように、頭を右に傾けようとする。動かない。体が動かない。

羽音が近づく。どんどん大きくなる。耳のすぐそば、もう数センチもないような近さで羽音が聞こえる。

声も出せない。電車のブレーキがかかり始める。残り十秒もかからずにドアは開く。彼女の顔は涙でおおわれる。早く。早く。

虫の腹に生えている触手が耳に絡みついてくる。羽音は鼓膜を貫くように鳴り続ける。

彼女は足の間から小便を漏らした。惨めさより、足が濡れる不快感より、この羽音から逃れたい。全身に力を入れ、どうにか動こうとする。しかし、ただ強張るばかりで動かない。

電車が止まった。ドアが開くまでもう少し。

虫が頭部の先を耳の穴にあてると、ぬめぬめとしていることがわかった。高速で動く羽の感触が耳から直接伝わり、頭の中で羽音と感触が彼女を殴りつけている。

虫は触手と羽の力で耳の奥にどんどん進んでいく。頭が入り。体が入りこもうとする。

『次はくれはね。くれはね。お出口は右側です』

声も出せず、体も動かない。だけど、扉が開けば救われる。彼女は漠然とそれを信じている。駅に着くまで残り5秒。ブレーキの音がする。電車の揺れる音がする。アナウンスが鳴っている。人の息遣いが聞こえる。羽音が鼓膜を殴っている。

虫は体をねじりながら進む。その体から大量の分泌液が出始め、彼女の耳は汚されていく。羽音と感触にぐちゃりとした音が追加される。彼女の涙でゆがんだ視界の中で、ホームの景色が流れていく。掲示板の光が涙を刺して、目に映るすべてが黄色く点滅している。

入る。入る。虫が入る。ホームに入る。電車は止まる。そして扉が開くのと同時に、虫は体を入れ終えた。

乗客は次々に電車を降りていく。彼女は耳の穴から液体を垂らしつつ、電車の中から外側をぼーっと眺めている。

「フフッ」

耳の中から虫の感触は消えてなくなっていた。ヒールの音を鳴らしながら歩きはじめる。

彼女が電車を降りると、待っていた人たちが電車に乗り込んでいく。濡れた床も、ひどい顔をした彼女のことも気にする人は1人もいなかった。彼女は電車の中で舌打ちをしてきた男の後ろをついていく。人を縫って、階段を上って、別のホームに降り、そこで電車が来るのを待つようだ。彼女も男の後ろに並んでいる。

前に立っている男は片足に体重をかけて、気だるげに携帯を眺めている。スーツ姿で、ネクタイまでしっかりと閉め、髪を上げた責任感の強そうな男だ。

『間もなく、8番線にとこすがら行きがまいります。危ないですので黄色い線までお下がりください』

右側から電車の音が聞こえて、しばらくすると電車の姿も見え始める。彼女は男の後ろでぼーっと背中を眺め、ちらりと電車を横目で見た。そして、電車が彼女と男の前を通り過ぎるとき、その男の背中を蹴り飛ばした。

男は携帯を手から落とし、そのままの線路の上に落ちていく。「えっ」という声を誰が発したのかはわからない。男は跳ねられ、どこかへ飛んだ。急ブレーキと、人のひしゃげる音がホームに響く。周りの人は焦り、誰かが緊急停止ボタンを押して、ほかの誰かは駅員を呼びに行く。

彼女はぼーっと眺めている。駅員が彼女の肩を叩き、何が起きたか聞き出そうとする。警察を呼ばれ、人に囲まれ、駅員の瞳には彼女の悲惨な姿が映し出されていた。

緊急停止ボタンの音が鳴っている。人がざわめいている。ブレーキの音がこびりついている。今自分を囲んでいる全ての音は、耳の中にある虫の羽音とすごく似ているんじゃないか。そう、彼女は思った。